

それから水面に向かって伸びる水中茎とからできている。春、水中茎の先端から浮葉を出す。浮葉は幼葉のときは寒天質につつまれ、柔らかく、狭いすき間も簡単に通りぬけ水面に達することができる。このような形態や生育様式から、フサジュンサイやガガブタの優占する水域に、生育域を拡大することができるものと考えられる。

6. まとめ

名古屋市の猪高緑地内の水田かんがい用ため池、塚の杵池で水草相11年間の動態を観察した。

- (1) 人為的に投入されたフサジュンサイが、大繁茂し、従来生育していたヒシ、ガガブタ、ホソバミズヒキモの生育に影響を与えた。特にヒシは激減し、絶滅寸前に追いやられた。
- (2) フサジュンサイが短期間に生育域を拡大できるのは、その繁殖様式にあると考えられる。その1つは、茎が「切れも」状になって、池底に沈むと容易に発根、定

着できることで、その『切れも』づくりに釣り人が一役かっている。

その2つめは生育様式で、水底に密生した茎がマット状に広がることで、他の水草の入る余地はなくなり、その生育域を占拠することである。

- (3) 過去に生育していたと思われるジュンサイが、岸辺に出現し、拡大傾向にある。これは泥中の種子が釣り人による池底の攪乱で刺激を受け、発芽したものと考えられる。
- (4) このような水草相の動態は、遷移とは違い、人為的な影響によりひき起こされたものである。

参考文献

- 浜島繁隆・須賀瑛文, 1986. 塚の杵池とその周辺の植生。ため池の自然 4: 3—5.
- 名古屋市環境科学研究所, 1993. 市内河川・ため池等の水質変遷。II—2—22~26.

○中西 正・倉内一ニ『葦毛湿原調査報告書 II』(豊橋市教育委員会発行, 1994年6月, 78p)

愛知県豊橋市にある葦毛湿原は、貧栄養立地の湧水湿地としては比較的大規模で、遊歩道を作って一般に開放すると共に保全のための取り組みでも先進的な場所である。このような湿原は放置すればやがて遷移が進み消滅するのが宿命であるが、特定の種を除去することによって遷移の進行をおしとどめ、貴重な湿地の植生を回復させようという実験が行なわれている。この報告書は、その実験の中間報告である。ヌマガヤを除去するとその後5年間の間に何が起こったのか、裸地をつくとどのような植生が回復するか、といった観察記録をほとんどそのまま収録したものであるが、このようなデータこそ湿地保全の試行錯誤の中で求められているのであろう。他の湿地の保全のためにも参考になることが多いと思われる。

○『渥美半島むくろじ湿原植生調査報告書』(愛知県豊橋農地開発事務所, 1994年7月, 76p)

愛知県渥美郡田原町にある標記の湿原の近くでトンネ

ル工事が行なわれた。その影響の実態を明らかにするための調査報告書である。数ページの本文のほかは美しいカラー写真と調査データの図表で構成されている。いくらかの変化が既に現われているようだが、本当の影響評価のためには、今後の継続調査が必要で、そのための基礎資料になるう。

○『国指定天然記念物小堤西池カキツバタ群落調査報告書V』(刈谷市教育委員会, 1994年3月, 81p)

小堤西池ではカキツバタ群落保全のためにさまざまな取り組みが行なわれているが、その基礎となる学術調査も10年余のデータが集まった。今回の報告書は、その総括を目指したものである。植生の10年間の動態、永久方形区やベルトトランセクトの10年間の変化など貴重な資料がまとめられている。末尾には、このシリーズの恒例(?)となった小堤西池に関する新聞記事のスクラップ集があり、カキツバタ群落保全のためのさまざまな動きを知ることができる。

(角野康郎)